

飼い主がしつけ教室で学ぶこと —犬の行動原理の理解テストを通じて—

What dog owners learn in puppy training classes:
Measuring knowledge of behavioral principles as applied to family dog training

関西学院大学文学部総合心理科学科 中島 定彦
Sadahiko Nakajima, Kwansai Gakuin University

キーワード：行動原理 行動変容 しつけ教室 飼い主訓練

keywords：behavioral principles, behavior modification, puppy training school, owner training

1. 本研究の目的

近年、「犬のしつけ教室」が盛況であるが、そこではドッグトレーナーが心理学における行動理論から導き出された行動原理を家庭犬のしつけに有効であるとして、普及啓発活動や技術指導に務めている。行動理論に基づく家庭犬の訓練では、ドッグトレーナーが犬の行動を実際に変容させる場面を飼い主に見せ、飼い主自身にその技法を習得させるとともに、行動変容の原理を理解させることになる。つまり、犬だけでなく飼い主も学習することが要請されるが、しつけ教室に参加した飼い主の技量や知識を客観的に測定する試みはまだ本格的に行われていない。そこで、本研究では、「行動原理の知識テスト」の開発とその妥当性・信頼性の検証を行った。これにより、犬の飼い主がしつけ教室で行動原理の知識をどれだけ学び、理解しているかを確かめることができるようになる。

なお、犬のしつけ教室は様々な形で行われている。例えば、「犬の幼稚園」という形態がある。本研究ではまず、犬の幼稚園の現状をウェブサイト分析により明らかにするとともに、その認知度などを調査した。さらに、しつけ教室全般の現状についても、ウェブサイト分析により多角的に検討した。これらの調査によって、「飼い主がしつけ教室で学ぶ背景」の把握を行うことを目指した。

2. 家庭犬のしつけに関する行動原理の知識テスト

本研究では、家庭犬の学習心理学的行動原理に関する飼い主の知識を測定するテスト(Knowledge of Behavioral Principles as Applied to Dogs, KBPAD)を作成し、その信頼性と妥当性を検討することにした。テスト作成に当たって手本としたのは、子どもの行動変容の原理をその親に対して指導するための道具としてO'Dellら¹⁾が開発した行動原理の知識テスト(Knowledge of Behavioral Principles as Applied to Children, KBPAC)である。

KBPACは子どもの親を対象に行動原理の知識を測定するため開発されたものだが、それに倣って、例えば、疼痛患者や入院患者にかかわる医療スタッフの行動原理の知識を測定するテスト^{2,3)}なども作成されている。そこで、われわれは、同様の方法で家庭犬の行動原理に関する飼い主の知識を測定するテストを開発することにした。行動理論では、行動変容の原理は動物種を超えて普遍的であると仮定しているからである⁴⁾。

2.2. 方法

50項目からなるKBPACの日本語訳⁵⁾から、犬には不可能な行動や非現実的な状況を含む質問項目を排除したり、犬にふさわしい表現に改めたりして、25項目からなるKBPADを試作した。各質問文には答えを4つ(正答1つ、誤答3つ)ずつ設けた。

KBPACの弁別的妥当性を分析することを念頭に、犬の行動原理に関する知識に差がみられると想定される以下の6群のデータを分析した。

一般飼い主群 29 名、一般学生群 26 名、心理学部生群 20 名、心理院生群 9 名、犬訓練士群 18 名、動物看護師群 14 名。

2.3. 結果および考察

項目間の内的整合性を確認するために、分析対象者全員の選択回答データの正誤をもとに α 係数を算出したところ .808 であり、実施した KBPAD はほぼ等質な質問項目を含む信頼性のあるテストだと言える。しかし、各項目の得点とその項目以外の項目の得点合計との関係を調べる I-R 相関分析 (item-remainder correlation analysis) を行うと、全 25 項目中 2 項目 ($r = -.025$, $r = -.005$) は有意でなかった。そこでこの 2 項目を除く 23 項目について、 α 係数を算出したところ .827 となり、改めて I-R 相関分析を実施すると、23 項目すべてで有意であった (相関係数 r は .147~.519) ので、これを正式な KBPAD とし、以下はこの 23 項目について検討することにした。

KBPAD23 項目の得点合計の平均と標準偏差を図 2-1 に示す。23 項目すべて 4 択式のため偶然正答数は 5.75 であり、全群でこの値よりも高い。最も成績の良い心理院生群は最も成績の悪い一般学生群の 2 倍以上の得点を得ている。

各群の正答数に対して、分散分析を行ったところ、群差が認められた ($F(5, 192) = 26.98$, $p < .001$)。Ryan 法による下位検定の結果、一般飼い主群と一般学生群の間には差がなく、この 2 群は他の 4 群よりも成績が悪かった。他の 4 群間では心理学部生群が心理院生群や犬訓練士群よりも有意に成績が悪かったが、それ以外の対比較は有意でなかった。一般の学生や飼い主よりも、心理学を学んだ学部生や大学院生、犬訓練士や動物看護師の得点が高かったこと、大学院生や犬訓練士の成績が特に良かったことは、KBPAD の弁別的妥当性を保証するものである。

KBPAD の得点には、犬飼育経験の影響は見られなかった。これは、単に犬を飼ったことがあるだけでは、家庭犬の行動原理を理解するには至らないことを示唆している。

なお、本研究は『ヒトと動物の関係学会誌』第 30 号 (2011 年 12 月発行) の 59~60 ページに「家庭犬のしつけに関する学習心理学的行動原理の知識テスト (KBPAD) の作成」 (著者は中島定彦・垣見美樹) と題して掲載予定である。

われわれは現在、飼い主が犬の行動原理に関する知識をしつけ教室でどの程度学び、身につけるかについて明らかにするため、複数のしつ

け教室に KBPAD 質問紙を配布し、データの収集を行っているところである。

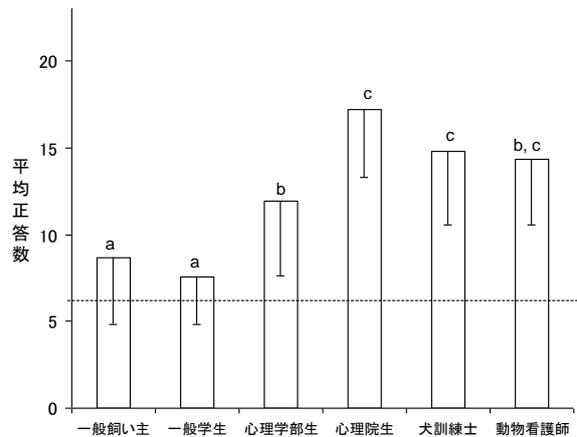


図 2-1 KBPAD23 問の得点総数の平均と標準偏差。Ryan 法による下位検定の結果、群差のない組み合わせには同じアルファベットを付している。

3. 「犬の幼稚園」の現状分析と意識調査

本研究では、「犬の幼稚園」に対するイメージと現状について明らかにするため、[街頭調査]、[ウェブサイト分析]、[質問紙調査]の 3 つを実施した。なお、本研究は『犬の幼稚園』から知る飼い主と犬の関係」と題して、ヒトと動物の関係学会第 7 回大学院生学術発表審査会 [関西地区] (2011 年 1 月 23 日) で共同研究者の森田が発表した。また、抄録が『ヒトと動物の関係学会誌』第 28 号 (2011 年 3 月発行) の 54 ページに掲載されている (著者は森田詩織・中島定彦)。

3.1. 街頭調査

2010 年 10 月 13~14 日に、大阪府大阪市住吉区および兵庫県芦屋市において、公園などで犬を連れて散歩している飼い主にインタビュー形式で街頭調査を行った。対象者は各地域 25 名 (計 50 名) で、このうち「犬の幼稚園」を知っていたのは、それが無い住吉区で 7 名 (認知度 28%)、ある芦屋市では 18 名 (52%) であり、認知度は後者のほうがやや高い傾向にあった ($\chi^2(1) = 3.00$, $p = .08$)。1 回あたりの予想料金 (平均 4,975 円) と希望料金 (平均 3,868 円)、ペットに費やす月々の料金 (平均 11,218 円)、飼い犬の年齢 (平均 6.1 歳) については、両地域間で有意差がなかった。

3.3. ウェブサイト分析

2010 年 9~10 月にインターネット検索エンジン最大手の Google を用いて、検索ワードを「犬

のようちえん」や「犬の幼稚園」とすることで発見した 51 件の犬の幼稚園のウェブサイトについて、調査した。その結果、「犬の幼稚園」は首都圏に多く、入会金無料の幼稚園は全体の約 4 割、入会金を設定している幼稚園の平均料金は 14,157 円で、1 回あたりの平均料金は 4,945 円。上述の[街頭調査]で尋ねた予想料金とほぼ等しく、希望料金よりも千円余り高かった。

3.4. 質問紙調査

2010 年 10~11 月に兵庫県芦屋市の「犬の幼稚園」を利用している飼い主 30 名（幼稚園群）と大阪府茨木市の動物病院内のしつけ教室を利用している飼い主 8 名（しつけ教室群）の合計 38 名に対して質問紙調査を行った。ペットに費やす月々の費用は、幼稚園群（平均 33,818 円）の方がしつけ教室群（平均 10,500 円）よりも有意に高額（ $U = 4, n_1 = 11, n_2 = 7, p = .008$ ）であった。

4. 犬のしつけ教室の現状分析

犬のしつけ教室の現状をウェブサイトから明らかにすることを試みた。2011 年 6~11 月にインターネットで確認したしつけ教室 875 件を本調査の対象とした。なお、本研究は 2012 年に学会発表し、論文を上梓する予定である。

4.1. 名称と業態の特徴

調査の結果、「犬のしつけ教室」とされるものにはさまざまな業態が含まれることが判明した。そこで、まず業態を以下の 7 タイプに分類した。

◆訓練所タイプ

犬を 1 ヶ月以上の期間で預かって訓練し、専用の訓練施設を有するものである。名称は、警察犬訓練所、愛犬訓練所、ドッグスクールと表示されている場合が多い。犬に直接指導する預託訓練が中心だが、出張訓練や、預託終了後飼い主が家庭で犬を扱えるようにする「飼い主対象の引き継ぎレッスン」を行っているところもある。また、休日などを中心に「しつけ教室」という名称で、飼い主と犬が参加するレッスンも行われている。

◆出張訓練士タイプ

犬に直接訓練を行い、出張訓練を実施し、専用の訓練施設を有しないものである。名称は、愛犬訓練所、ドッグスクール、ドッグトレーニングと表示されている場合が多い。出張訓練を主に活動するタイプである。飼い主の元へ出張するか、犬だけを預かり訓練を行う。専用の訓練施設や犬舎はもたないが、自宅にて預託訓練

をする場合もある。飼い主への指導も行うが、訓練士の方法を飼い主が模倣するが多い。

◆保育園・幼稚園タイプ

犬に直接指導を行い、日帰りで預かりしつけを実施し、専用の訓練施設を有するものである。名称または事業内容に幼稚園、保育園、デイケア、ドッグナーサリーと表示されている。通園で日中、犬だけを預かり、犬や人との遊びを通じて、社会化を主とした訓練が行われている。ほとんどの場合、幼犬を対象としており、問題行動の予防に力を注いでいる。

◆しつけ方教室タイプ

飼い主にしつけ方の指導を行い、複数で行うクラスを設けているか固定場所でのプライベートレッスンを行うものである。名称に教室と入っているところもあるが、必ずしもそうとは限らない。パピークラス、入門クラス、社会化クラスなどのクラス分けがなされており、少人数制で犬連れの飼い主にしつけ方を継続的に指導する。指導者には、犬の訓練技術だけでなく、飼い主へのわかりやすい指導、実施場所との交渉など多くの能力が求められる。行政や愛護センターなどが実施する「しつけ方教室」もここに含まれる。

◆訪問レッスンタイプ

飼い主にしつけ方の指導を行い、家庭を訪問して飼い主にプライベートレッスンを実施し、専用の訓練施設を有しないものである。しつけ方教室タイプのインストラクターが行う場合も多いが、教室の実施場所、クラス運営のノウハウがなくても行えるのが長所である。出張訓練士タイプとの違いは、犬を直接トレーニングするのではなく飼い主への指導が中心となる点である。

◆動物病院タイプ

動物病院で実施しており、飼い主にしつけ方の指導を行うものである。動物病院では、パピーパーティを中心とした「しつけ教室」が多く行われている。パピーパーティは幼犬が対象で、ワクチン接種の時期と重なることから、ワクチン接種犬へのサービスとして行われているところもある。指導内容は、遊びを通じての子犬の同士の社会化や、どこを触られても嫌がらない練習などが多い。

◆ペット関連施設・ショップタイプ

施設を有し、しつけや訓練以外の主業務があるものである。ペットショップ、ドッグサロン、ペットホテル、ドッグラン、ドッグカフェとな

どで行われている教室であり、指導者は、店舗スタッフの場合や、トレーナーやインストラクターに依頼する場合がある。

4.2. 所在地

しつけ教室は首都圏や関西地区に多く存在しているが、これらの地区は犬の飼育頭数も多いため、厚生労働省発表の都道府県別畜犬登録頭数（平成21年度末現在）をもとに、しつけ教室数と登録頭数の比率を求めた。全国平均を1とした場合、第1位は京都府で1.68、次いで1.61の東京都、1.56の大阪府、1.56の兵庫県と続く。

なお、地域ごとに業態タイプに大きな違いが見られた。北海道地区や東北地区では、訓練所タイプが40%以上を占める「訓練所中心型」であり、いっぽう四国地区はしつけ方教室タイプが半数を占める「しつけ方教室中心型」であった。北関東地区、甲信越地区、中国地区では、この2タイプが拮抗していた。首都圏地区や関西地区では、動物病院タイプを除き、すべてのタイプがほぼ等しく存在する「バランス型」であった。東海地区ではしつけ方教室タイプとペット関連施設・ショップタイプが多く、北陸地区では動物病院タイプが他地区に比べて高比率で、九州地区では保育園・幼稚園タイプが他地区に比べて高比率であった。

4.3. 指導方針

調査対象875件中、指導方針が表示されているものは全体の58.5%であった。動物行動学や行動理論に基づく指導は23.8%であった。指導方針の表示率を業態タイプ別にみると、訪問レッスンタイプで最も高く、72.4%が表示していた。飼い主宅を訪問して、飼い主にマンツーマンで指導するため、飼い主に対して事前に指導方針を知らせておく必要があるからであろう。次に表示率が高いのは保育園・幼稚園タイプで68.8%であった。子犬の社会化といった、パピー教育の重要性を記したものが多く見受けられた。訓練所タイプ（48.3%）や出張訓練士タイプ（38.6%）では過半数が指導方針を表示していなかった。なお、これらのタイプでは、動物行動学や行動理論に基づく指導であることの表示もほとんどなされておらず、訓練所タイプで4.0%、出張訓練士タイプでは0%であった。

4.4. 参加スタイルと実施場所・施設

参加スタイルは「犬のみ参加」が全体の50.6%、「飼い主のみ参加」が6.6%、「犬と飼い主の双方参加」が89.3%であった。「犬のみ参加」と「犬と飼い主双方参加」の両方の参加スタイルを設

けているところが多かった。

実施場所は「屋外」が全体の59.4%、「室内施設」が70.5%であった。両方で行われている可能性が考えられる。また、専用施設を有しているのは、全体の36.6%であった。

4.5. 指導者の資格

サイト全体の6割弱で「動物取扱責任者【訓練】」登録の表示がされていた。「動物取扱責任者【訓練】」の表示率は、訪問レッスンタイプが72%と高く、次いで出張訓練士タイプの68%であった。出張・訪問という施設を持たない存在であるため、「動物取扱責任者【訓練】」の表示で利用者に安心感を与えることが必要だからであろう。

しつけ教室の指導者が有するしつけ指導に関連する資格で最も多かったのは、ジャパンケネルクラブ(JKC)公認訓練士で277名、2位は日本警察犬協会公認訓練士の196名であった。訓練所タイプに最も有資格者が多く、特に日本警察犬協会、ジャパンケネルクラブ、日本シェパード犬登録協会の公認訓練士が集まっていた。出張訓練士タイプも同様であった。保育園・幼稚園タイプやしつけ方教室タイプでは、ジャパンケネルクラブの公認訓練士がやや多いものの、多彩な有資格者が存在していた。特にJAHA認定、D.I.N.G.O認定のインストラクターは、しつけ方教室タイプに多く見られた。ペット関連施設・ショップタイプでは、Wiz.dog Club NEWライセンス認定JWDTの有資格者が多かった。

5. 引用文献

1. O'Dell SL, Tarler-Benlolo L, Flynn JM. An instrument to measure knowledge of behavioral principles as applied to children. *Journal of Behavior Therapy & Experimental Psychiatry*; 1979; 10: 29-34.
2. Sanders AH, Webster J. An instrument to measure nurses' knowledge of behavioral methods with chronic pain patients. *Journal of Behavior Therapy & Experimental Psychiatry*; 1982; 13: 63-68.
3. McKeegan GF, Donat DC. An inventory to measure knowledge of behavioral methods with inpatient adults. *Journal of Behavior Therapy & Experimental Psychiatry*; 1988; 19: 229-236.
4. 中島定彦. アニマルラーニング—動物のしつけと訓練の科学—. 京都: ナカニシヤ出版; 2002.
5. 三好隆史. 原典『KB PAC』. 自閉症児教育研究; 1979; 2: 30-42.